

入江信子先生のひととなり

山崎 文夫

入江信子先生は、女性法律家を多数輩出した明治大学短期大学法律学科を卒業され、明治大学法学部に編入後、恩師・松岡三郎先生（元明治大学法学部長・元日本労働法学会代表理事）の「労働法講義」に感銘を受け、労働法研究者を志されました。

入江先生は、「アメリカにおける労働差止命令の研究」（明治大学大学院修士論文）から労働法研究を始められ、アメリカやわが国の労働争議や労働協約、労働委員会などの集团的労働法の諸問題の研究に精力的に取り組まれてきました。

我々、明治大学大学院の後輩は、合宿などで大変お世話になったこともあり、先生の旧姓に親しみを込めて仲間内では「クロちゃん」と呼んでおりましたが、入江先生は、労働法学者を志されていたのであり、ご自身が女性労働法学者と呼ばれ、女性労働問題（婦人労働問題）の研究を期待されることを本意ではないと思っておられました。しかし、時代の日本労働法学会は、当時数少ない女性労働法研究者のひとりである入江先生に女性労働問題の研究を促さざるを得ず、先生は、日本労働法学会での学会報告「婦人労働者をめぐる労働基準法上の立法論的研究」（一九七八年五月）を始めとして、日本労働法学会誌やジュリスト、季刊労働法などの専門誌や、各種出版物、大学紀要などにおいて、女性労働法に関する論稿を発表されており、日本労働法学会創立三〇周年記念・現代労働法講座全一五巻（総合労働研究所・一九八二年）でも、「婦人・年少労働行政」を執筆されるなど、女性労働法研究の分野において活躍

されてきました。この頃から、入江先生は、子供を生み育てながら働かなければならない人、身体に障害を抱えて働かなければならない人、高年齢という理由だけで企業から締め出されている人、パートという形で働かなければならない人などの雇用について、企業や政府は、どのような対策や政策をとり、どのような方向に進めばよいかということとを、常に考えておられたようです。

入江先生ご活躍のさなかの一九八五年に制定されたわが国の男女雇用機会均等法は、当初事業主の努力義務を中心的内容とする法律として出発しましたが、一九九七年改正により女性労働者の募集・採用から、配置・昇進、教育訓練、福利厚生、退職に至るまでの雇用のあらゆるステージでの女性差別を禁止する法律となり、二〇〇六年六月改正・二〇〇七年四月施行の現行改正均等法は、男女の性別を問わず雇用における性差別を禁止する法律となり、女性労働問題は雇用における男女平等問題に変わってきております。

日本労働法学会においては、男女を問わず雇用における男女平等を研究する者が育ってきており、他方で、入江先生が研究されてきた労働組合などの集团的労働法の重要性を再認識させる、雇用が不安定なパート労働者やアルバイト労働者などのフリーター問題やワーキング・プア問題がわが国でも発生し、先生がいち早く研究を始められた高齢化社会問題や周辺の労働者の労災補償問題は現実問題となっています。入江先生にとっては、研究テーマの選択に迷う状況になってきましたが、先生には、これまでどおり着実に発言を続けていただきたいと思います。

二〇〇八年一〇月